

国際関係理論と事例研究

——新たな方法的枠組みの構築に向けて——

伊藤隆太

はじめに

一 決定不全性に由来する国際政治理論研究への批判

二 科学的実在論による決定不全性の克服

(一) 科学的実在論

(二) 観点主義

(三) ケースの検討——ネオリアリストと新古典派リアリスト

(四) 観点主義を生産的な形で実践するための指針

三 多元的実在論と国際政治学の実証主義

(一) 多元的実在論の構造

(二) 国際政治学の実証主義における二つの起源——道具主義と科学的実在論

(三) 経験主義的バイアスの克服へ向けて

おわりに

はじめに

理論は事例からどこまで検証できて、いかにして評価されるのだろうか。こうした問いの核心にあるのが決定不全性 (underdetermination、以下 UD と記す) ⁽¹⁾ という、国際政治学のみならず、社会科学・自然科学全般に重要な含意を持つ科学哲学の学説である。宮下明聡や保城広至をはじめとする有力な国際政治学者が論じているように、事例解釈・理論検証などの理論研究手法をめぐる議論の根底には、理論を事例から一意に選ばないという UD の問題があるのである。⁽²⁾

UD は国際政治学でパラダイム内外の論争を生みだすのみならず、歴史家と理論家の間の対話を困難なものとしている。しばしば歴史家から理論家に対しては、交錯した史実の理論化など不可能であるといった批判が加えられる。⁽³⁾ 根本的に事象の個性性に興味を寄せがちな歴史家にとり、複雑な歴史を単なる事例とみなし、競合理論を比較・検証して単一の理論を選ぶことなどそもそも不毛であり、それが達成できるという理論家の信念は傲慢なものに映るのである。こうした批判を哲学的に洗練すると行きつくのが、UD というテーゼである。

本稿の目的はこの UD に由来する国際政治理論研究への批判を、科学哲学の科学的实在論 (SR: Scientific Realism、以下 SR と記す) ⁽⁵⁾ ——その中の観点主義 (perspectivism) ⁽⁶⁾ を中心として——により克服し、国際政治学の実証主義 (positivism) ⁽⁷⁾ に経験主義的バイアスからの脱却を提案することにある。具体的には、①経験的研究 (定性的事例研究・定量的統計分析など) による理論評価には限界があり、②理論の徳 (理論評価基準、認識論的徳ともいう) ⁽⁸⁾ には経験的データとの整合性以外にも多様なものがあることを明らかにする。

このとき、右記の議論を体系化したものとして、理論の目的を対象に単一の説明を与えるのではなく、むしろそれに多角的視点から複数の説明を与えることとする、多元的实在論という新たな方法論モデルを提示する。同モ

デルに基づくことで、国際政治学者はポストモダンリズムの議論に与することなく、世界の真理への接近を前提としつつ、理論的多元主義 (Theoretical pluralism) —— 多様な理論・要因・基準の共存を支持する態度 —— を擁護できるようなろう。⁽⁹⁾

その際、本稿では主に国際政治理論のリアリズムを例として挙げる。その理由は、①同理論をめぐりUDにかかる論争が繰り返し広げられてきた、②国際政治学で有力なりサーチプログラムである、③内部に多様な下位理論を含むため、リサーチプログラム内部の多元主義にも言及できる、④単一のリサーチプログラムに焦点を絞ることでの分析上の一貫性が確保できる、といった点にある。

ベネットが「国際政治理論はメタ理論的な議論を避けて通れない」と述べているように、科学哲学の議論は国際政治学の方法論を発展させる上で不可欠である。⁽¹¹⁾ 本稿は近年擡頭するこの科学哲学に基づく国際政治研究の一試論であり、それには国際政治学の実証主義をSRの観点主義という、これまで見逃されていた新たな視点から再考し強化するという意義が考えられる。

本稿の手順は以下の通りである。第一節ではUDに由来する国際政治理論研究への批判を再考する。第二節ではSRの観点主義に基づき、同批判を克服可能とする論理を提示する。第三節では同論理を多元的実在論という方法論モデルとして体系化し、それがいかにして国際政治学の実証主義を発展させうるのかを示す。最後に本稿を総括する。

一 決定不全性に由来する国際政治理論研究への批判

UDは決定実験の不可能性というピエール・デュエム (Pierre Maurice Marie Duhem) のテーゼを、ウィラー

ド・ヴァン・オーマン・クワイン (Willard van Orman Quine) が人間の知識全般に関する一般的命題に昇華させた学説である。その主な論理は、理論は経験的データ (事例) から一意に決められないというものである。⁽¹²⁾ 理論 A に競合理論 B が想定されるとき、理論家は可能な経験的データからいずれが正しいのかを決められない。なぜなら理論は主要仮説に加え多様な補助仮説を伴い検証されるが、その過程で理論家は反証原因を標的の主要仮説でなく、任意の補助仮説に帰すことができるからである。このことから理論家は理論検証を恣意的に行える、理論評価の客観的基準など存在しえないといった、ポストモダン主義的主張が導きだされるのである。

勢力均衡理論を例に挙げよう。ケネス・ウォルトツ (Kenneth Neal Waltz) のネオリアリズムは国家がパワーに均衡化すると仮定するが、⁽¹³⁾ 国家がパワーに均衡化しない事例が発見されて、こうした逸脱事例を説明すべく、国家はパワーでなく脅威に均衡化するというウォルトの脅威均衡理論 (balance of threat theory) が生みだされる。⁽¹⁴⁾ ところが、脅威均衡理論は指導者が直面する国際システム上の脅威を扱えるが、クーデター・革命などの国内脅威 (internal threat) を扱えない。そこでこの問題を克服すべく、ステイヴン・デイヴィッド (Steven R. David) が全均衡化理論 (omnibalancing theory) という、指導者が国内外の脅威に均衡化することを説明する、リアリズム版の 2 レベルゲーム理論を構築する。⁽¹⁵⁾

しかし、その後さらに全均衡化理論には指導者が均衡化政策を選ぶ上で制約となる、脅威の優先順位が曖昧である (国内、国外いずれの脅威が重要か) という欠点があることが見つかる。すると、この問題を克服すべく新古典派リアリズム (neoclassical realism) の枠組みに基づき、⁽¹⁶⁾ より明示的な形で国際システム上の脅威を独立変数、国内脅威を媒介変数、国家行動を従属変数に設定するステイヴン・ロベル (Steven E. Lobell) の複合的脅威識別モデル (complex threat identification model) が生みだされる。⁽¹⁷⁾

右記の勢力均衡理論の変遷を鑑みると、逸脱事例が見つかる次々と補助仮説 (パワー・脅威など) を修正・

追加して、リサーチプログラム全体が反証されるのを防ごうとしている、アドホックに諸変数を濫用しているといった、既存のリアリズム批判には一定の妥当性があるように思えてくる。⁽¹⁸⁾ リアリズムへの批判者はこれまで明示的には言及してこなかったが、こうした批判はイムレ・ラカトシュのリサーチプログラム論のみならず、UDによっても根拠づけられるのである。

いかなる反証例に直面しても、アドホックに補助仮説を加えそれが克服できるなら、研究を客観・中立的に行うことなどそもそも不可能ということになり、このことは究極的には、ファイヤアーベント流の何でもあり(ananything goes)の相対主義に帰結する。⁽¹⁹⁾ 原理的に理論が事例から一つに絞れないなら、現に選ばれている理論は複数の可能なモデルのうちの一つに過ぎないこととなり、理論が現実を正しく表象していると信じる根拠は薄弱になる。⁽²⁰⁾ つまるところ、こうしたUDの論理は実証主義的な国際関係理論研究には限界があるという、ポストモダニスト(国際政治学ではラディカルなコンストラクティビストや批判理論家など)の主張を哲学的に論拠づけるものなのである。ところが、科学哲学の中にはこのUDへのアンチテーゼも存在する。それが以下で紹介するSRである。

二 科学的事実論による決定不全性の克服

(一) 科学的事実論

SRはミアシャイマー、ウォルト、ウエント、ベネットをはじめとする有力な国際政治学者が支持する科学哲学の重要な学説である。⁽²¹⁾ 理論系の主要学術雑誌の一つ *Millennium* でその特集が組まれていることが示唆するように、SRは数ある科学哲学の学派の中でも、国際政治学の方法論を発展させる上で特に有益なものとされている。

(22) 国際政治学のリアリズムがそうであるように、SR の内部にも論争があり、それには構造实在論 (structural realism) 、対象实在論 (entity realism) 、半实在論 (semi realism) といったバリエーションがある。それゆえ SR を一意に定義するのは難しいのだが、それにもかかわらず、それに一定の特徴を見いだすことは可能である。

すなわち SR では一般的に、①「科学において測定される観察不可能な事物 (unobservable : 筆者注) が存在する」、②「成熟した科学 (mature science : 筆者注) で受け入れられている科学理論は近似的に真 (approximately true) である」という前提から、⁽²³⁾「われわれとは独立に存在する世界について、観察できないところも含め真理を見出すこと」⁽²⁴⁾が目指される。換言すれば、SR において科学や理論の目的は、観察不可能な部分も分析射程に収めつつ、近似的真理へ漸進的に接近していくこととされるのである。⁽²⁵⁾

SR はしばしば実証主義を堅持しつつアイディアという観察不可能な要因を扱う、ウエントのような穏当な (moderate) コンストラクティビストに固有の方法論とみなされる。⁽²⁶⁾しかし特定のリサーチプログラムに属さないベネット、ハードナリアリストのミアシャイマーが支持していることが示すように、SR は必ずしもウエント型の実証主義コンストラクティビストの専売特許ではない。⁽²⁷⁾つまるところ、SR は国際政治学に科学的に従事することを志す、全ての理論家にとり重要な学説なのである。

(二) 観点主義

真理へのアクセスを拒絶する UD という反实在論 (anti-realism) ⁽²⁸⁾ テーゼに、SR は真つ向から対抗するが、その中でも観点主義は特に重要なロジックを提供してくれる。観点主義は UD に対し単純に理論は事例から検証できると反論することはしない。むしろそれは UD と同様に、理論が事例から厳格に検証できるという態度には懐疑的である。しかしそれにもかかわらず、観点主義は UD と以下の点で大きく異なる。

UDからはしばしば、理論は事例から厳格に検証できないので理論家は真理に近づけない、理論家は補助仮説をアドホックに利用し逸脱事例を説明できるので研究の客観性は担保できない、といったポストモダニズム的主張（懐疑主義・非合理主義・不可知論・相対主義など）が導きだされる。これに対し観点主義は前記のSRの原則を前提としつつ、以下の論理から、理論家は多角的視点から世界と一定の類似性を持つモデルを獲得できる、という限定的な実在論を堅持する。

理論は特定の観点から世界の特定の局面を表象するものであり、人間が持ちうる理論は常に実践的・目的に規定されている。それゆえ、世界についてのあるがままの表象モデルというものを我々は持ちえず、事象に関する唯一無二の真の記述なるものは絵に描いた餅に過ぎない。したがって、理論を一意に決めねばならないというUDの前提はそもそも誤っている。⁽²⁹⁾ こうした観点主義の複数理論の併存を擁護する論理によれば、国際政治学者はシニカルなポストモダニズムに与することなく、理論的多元主義を擁護できるようになるのである。⁽³⁰⁾

(三) ケースの検討——ネオリアリストと新古典派アリリスト

以下、ネオリアリストと新古典派アリリストを例として、これまで国際政治学者がいかにして観点主義的な発想に基づき、理論的多元主義の重要性を認識してきたのかを示したい。

ネオリアリズムは国内要因を捨象して、国際システムの構造的要因を重視する理論である。こうした構造的要因に偏向する理論へはしばしば、還元主義（この際、マクロな構造に対するそれ）や構造決定論に陥っているとの批判が浴びせられる。⁽³¹⁾ だが本当にネオリアリストは国際システムの構造という観点のみに基づき、歴史上のあらゆる国家行動が説明できると考えているのだろうか。それとも観点主義が示唆するように、ネオリアリストは国際システムの構造はあくまで数ある観点のうちの一つでしかないと自覚しているのだろうか。

結論から述べれば、一般的通念に反して、ネオリアリストは国家行動が構造的要因のみにより決まるとは考えたくないように思われる。実際、ネオリアリズムの泰斗のウォルトズでさえ、こうした構造決定論には否定的な態度をとっている。ウォルトズのネオリアリズムが国際政治学における構造主義の台頭を招いたことを鑑みれば意外に思われるが、彼自身は「第三イメージ（国際システム要因・筆者注）は、国際政治の枠組みを説明するが、第一（個人レベル要因・筆者注）および第二イメージ（国内政治・社会要因・筆者注）なしには、政策を決定する影響力についての知識はありえない」と述べ、指導者個人や国内政治・社会といった観点の重要性も自覚している⁽³²⁾。また同じくネオリアリストのミアシャイマーは、攻撃的リアリズムのバイブル『大國政治の悲劇』では構造的要因のみに焦点を当てた理論を構築しつつも、その他の研究では国内の利益集団（イスラエルロビー）⁽³⁴⁾や指導者個人（特に指導者がつくウツ）⁽³⁵⁾が、国家の外交政策に及ぼす影響力の重要性についても論じている。

多様な観点の自覚的な融合という意味で、新古典派リアリストの取り組みは特筆に値する。ランドール・シュウエラー（Randall L. Schweller）の過小均衡化理論（theory of underbalancing）⁽³⁶⁾を例に挙げよう。ネオリアリズムでは国際システムの構造が国家に均衡化の誘因・制約を与えるとされる。しかし、ネヴィル・チェンバレン（Arthur Neville Chamberlain）のナチスドイツへの宥和にみられるように、歴史上しばしば指導者は国内動員の障害に直面して均衡化政策に失敗している。

そこでシュウエラーはこうした逸脱事例を説明すべく、構造的要因を独立変数としつつ、媒介変数として国内要因——この際、エリートの場合（elite consensus）、エリートの団結（elite cohesion）、社会の団結（social cohesion）、政府の脆弱性——をネオリアリズムに加える必要があると説く⁽³⁷⁾。従属変数としての国家の均衡化行動をよりよく説明すべく、彼は構造的要因と国内要因という二つの観点を分析レベルの問題に自覚的な形で統合することを提唱しているのである。

(四) 観点主義を生産的な形で実践するための指針

ところがこうして多様な観点を折衷的に利用していると、変数の使用法がアドホックであるという批判を受ける可能性がある⁽³⁸⁾。それでは国際政治学者はいかにして生産的な形で変数を使いわけ、方法論に自覚的な形で理論的多元主義を実現しうるのだろうか。以下、そのための二つの指針を提案したい。

a 理想化

第一の指針は理論における理想化 (idealization) の役割を自覚することである⁽³⁹⁾。理想化とは現実には満たせない条件を立て、仮にそれが成立していたらどうなるであろうかと考えることを指す⁽⁴⁰⁾。たとえばビリヤードボールの衝突をモデル化する際、ボールの摩擦や空気抵抗は意図的に無視される。現実にはこれらは存在するので厳密な意味では誤りだが、ボールの衝突をモデル化するという目的において、この仮定は有益なものになっている。

同じことが国際政治理論にも当てはまる。たとえば、ミアシャイマーの攻撃的リアリズムは国内要因を捨象し、国際システムの構造的要因に焦点を当てて事象を説明する⁽⁴¹⁾。実際には構造的要因以外にも国家行動に影響する要因は無数にあるため、こうした理論設計は現実を完璧に説明する上では不十分である。しかしあらゆる変数とそれらの間の相互作用を検討していたら、攻撃的リアリズムという一つのモデルの中で、簡潔な分析を行うことは至難の業となるので、ミアシャイマーは意図的に国内要因を捨象しているのである。

つまるところ理論は必ずこうした理想化を経ているため、科学的実在論者ナンシー・カートライト (Nancy Cartwright) の比喩を借りれば、それは不可避にある種のウソ (lie) をついでいる⁽⁴²⁾。しかし、この種のフィクションは現実を理解するための良性的のものであり、経験主義者が考えるように、理論と事例の間の類似性を高めれば高めるほど現実への理解が深まる、というわけではないのである。

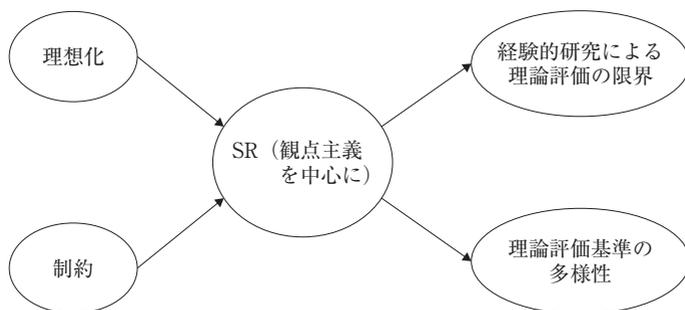
b 理論における制約の役割

第二の指針は理論における制約を自覚することである。この制約はしばしば「SがWをPのためにXを用いて表象している (S uses X to represent W for purposes of P)」という四項関係の形をとる。⁽⁴³⁾ 日本の対米開戦（一九四一年）を事例として、リアリズムを攻撃的リアリズムと防御的リアリズムに類型化してみよう。

攻撃的リアリストのミアシャイマー (S) は攻撃的リアリズム (X) を用い、同理論を検証すべく (P)、日本の対米開戦という事象を表象している (W)。⁽⁴⁴⁾ 同理論は合理性仮定に依拠して国内要因を捨象した形で日本の対米開戦を説明するが、その妥当性は理論の簡潔性・マクロ性を重視するというミアシャイマーの目的に依拠する。⁽⁴⁵⁾ 事例中の詳細な国内要因を挙げれば誤認識や国内政治の歪みにも言及できるが、こうした目的を掲げる彼にそれを求めることは不適切な要求であろう。

他方、防御的リアリストのジャック・スナイダー (Jack Snyder) (S) は、ログローリング理論 (logrolling theory) (X) を用い、同理論を検証すべく (P)、日本の対米開戦という事象を表象している (W)。⁽⁴⁶⁾ 同理論は攻撃的リアリズムほどの簡潔性を備えておらず、そもそもそれを志向していない。だがその代わり、ログローリング理論という防御的リアリスト理論は、構造的要因からの逸脱事例を国内要因の導入により説明するという目的を掲げ、攻撃的リアリズムが説明できない同事例中の非合理的側面を軍国主義や陸海軍間抗争の観点から説明する。⁽⁴⁷⁾

図1 多元的实在論の構造



三 多元的实在論と国際政治学の実証主義

(一) 多元的实在論の構造

前節ではSRに基づくことで、UDに由来する国際政治理論研究への批判が克服できることを明らかにした。ここまでの議論をモデル化すると、①SR、②理想化、③制約という要素を図1の形で配置できて、そこから以下で説明する、④経験的研究による理論評価の限界、⑤理論評価基準の多様性という命題が導きだされる。本稿は図1の方法論モデルを多元的实在論と呼ぶことにする。多元的实在論はSRの視点から、国際政治学の実証主義に経験主義的バイアスからの脱却を促すものである。以下このことを説明していく。

(二) 国際政治学の実証主義における二つの起源——道具主義と科学的实在論

まず、ここでは実証主義とは何かを科学哲学の議論を踏まえて論じる。しばしば混同されるが、国際政治学（広義には社会科学）の実証主義は、科学哲学のLP（論理実証主義）とは異なる、一九八〇～九〇年代に勃発した「第三の論争」⁴⁸——「実証主義」対「ポスト実証主義」——の文脈で捉えられるものである。実証主義を一意に定義するのは難しいが、それには大まかにいって、①自然界と人間社会は同じ科学的手法で分析できる（自然主義）、

② 観察の主観性にもかかわらず世界を客観的に知りうる (客観主義)、③ 自然界と同様、人間社会にも規則的事象が存在する (規則性への信念)、④ 知識は究極的には経験に裏付けられる必要がある (経験主義) という暗黙の前提がある。⁽⁴⁹⁾ 一口に実証主義といっても多様な論調があるが、それらは右記の四つの前提の間の比重をいかにするかで決まってくるのである。これらの前提と照らし合わせると、SR は自然主義と客観主義を受容する一方、厳格な経験主義と行動主義的な規則性を拒絶する——緩やかな経験主義は受容するが——ものとして理解できよう。⁽⁵⁰⁾

他方、LP は一九二〇年代後半にオーストリア、ドイツ、ポーランドでウィーン楽団 (カルナップ、ファイグル、ヘンベルらの論理実証主義者) により生みだされた——別名論理経験主義と呼ばれるように——観察という人間の行為を越えた実在を否定しようとする立場のことを指す。この経験主義の権化ともいえるきわめて反实在論的色彩の強い哲学的立場は、道具主義、操作主義 (operationalism)、構成的経験主義 (constructive empiricism) などの反实在論的学説に引き継がれていく。⁽⁵¹⁾ 科学哲学史において、SR はこの LP という科学に対する反实在論的・経験主義的展開に反旗を翻す形で台頭してきたのである。

さて、ここで実証主義とは何かを考える際に重要なのは、そのルーツに SR と道具主義という対立する哲学的テーゼを見いだせるということである。SR については既に説明してきたので、ここではその解説は割愛する。道具主義では理論は説明のための単なる道具とみなされ、理論の仮定——しばしば観察不可能なもの (勢力均衡のメカニズム、合理性仮定など)——は現実から乖離していても構わないとして、その真偽について不可知論が推奨される。⁽⁵²⁾ 道具主義は経済学者ミルトン・フリードマン (Milton Friedman)、国際政治学者ウォルツなど一部の有力な社会科学の実証主義者に支持されている。⁽⁵³⁾ こうした道具主義的な実証主義は同じく実証主義を標榜する議論でも、SR を支持するベネットやミアシャイマーのそれとは趣が大きく異なる。

この実証主義をめぐる論争において筆者が抱く問題意識は、一部の実証主義者が道具主義の路線を追求するあまり、ポストモダンニズムへ意図せざる援護射撃を行ってしまったのではないかとしているものである。コリン・ワイト (Colin Wright) が指摘するように、「多くの場合、最も影響力のある社会的プロセスは観察不可能なものである」⁽⁵⁴⁾。ところが道具主義に立つことで、理論の意義が道具としての有効性や単純性に置かれ、理論仮定等の観察不可能な事象への不可知論が求められるならば、理論家は多くの重要な事象を科学的に論じえないことになる。さらに問題なことに、この道具主義に由来する不可知論は、ポストモダンニズムの非合理主義や懐疑主義へと横滑りしていく危険を孕んでいる⁽³⁵⁾。

ウォルツの勢力均衡理論を考えてみよう。ウォルツは国際システムの構造が国家に勢力均衡の制約・誘因を与えるのと述べるだけで、その詳細な因果メカニズムの解明に消極的である⁽⁵⁶⁾。しかしこうした道具主義的態度は、勢力均衡の科学的基盤の探求を止め、それを単にメタファーとして理解することを認める解釈主義を招来するリスクを抱えている⁽⁵⁷⁾。これは仮にウォルツが古典的リアリズムの思想性を非科学的と批判して、ネオリアリズムという社会科学理論でその克服を目指しているならば、あるいは、ネオリアリズムが属するとされる合理主義・実証主義と解釈主義が対抗関係にあるならば、大きな論理的矛盾を孕んだ事態であるといえよう。

こうした理由から、本稿は理論を科学的に研究することを志すならば——フリードマン、ウォルツら道具主義者もこの点には同意するはずである——、実証主義者は観察不可能な事象への不可知論を貫く道具主義でなく、それをも科学的探究の射程に収めるSRに基づく必要があると考える⁽⁵⁸⁾。すなわち理論仮定や観察不可能な要因を科学的に論じる際、実証主義者はそれらを知りえない——知らなくても科学的研究が可能である(道具主義)——とするのでなく、それらについての近似的真理に多角的視点から漸進的に接近しうる——真理への接近も理論の重要な目的である(SR)——と考える必要があるのである。これにより、実証主義者はポストモダンニズム

的議論への横滑りを回避できるようにしよう。

この主張をモデル化したのが、実証主義が抱える経験主義的バイアスの克服を提案する多元的実在論という方法論モデルである。具体的には、同モデルは国際政治学の実証主義に対して、①経験的研究による理論評価には限界があり、②理論評価基準（理論の徳）には経験的データとの整合性以外にも多様なものがある、という知見を付け加える。以下、①と②を順に説明していく。

(三) 経験主義的バイアスの克服へ向けて

a 経験的研究による理論評価の限界

世界の真理に接近できるとするものの、S Rはその際の経路を理論と経験的データとの整合性に限らない。実際、S Rは経験的研究（事例研究・統計分析など）のみによる理論評価には限界があると考える。帰納法への諸懐疑論が示唆するように、これは観察数を増やせば検証の信憑性が増して解決できるといった単純な問題ではない。⁽⁵⁹⁾

たとえば、民主的平和論（democratic peace）⁽⁶⁰⁾はネオリアリズムよりはるかに扱うデータが多いが、必ずしも前者が後者より優れているとはいえない。なぜなら、前者は後者より相対的に理論の因果メカニズムが確立されていないからである。⁽⁶¹⁾仮に理論評価基準が経験的データとの整合性に限られるならば、経験的に観察が十分にできないもの——この際、民主主義と平和の間の因果メカニズムなど——の妥当性は不問に付されて、究極的にはいかなる形からなる理論でも現実が説明できればそれで良いということになってしまう。

しかし理論を単なる道具とみなす道具主義でなく、それに真理をも求めるS Rによれば、観察不可能な要因を含めた理論の中身の正しさも重要なテーマとなる。⁽⁶²⁾それゆえS Rの視点からは、我々は民主主義と平和の相関関係がいかに多くのデータに経験的に裏付けられても、それに内在する因果メカニズムが解明されない限り、民主

的平和論に高い評価を与えられないのである。⁽⁶³⁾

b 理論評価基準の多様性

このように考えていくと、統計データ分析や歴史的事例研究を行い検証を通過すれば理論の信頼性が担保できるといふ発想が、実はナイーブなものであるということが理解できる。観察不可能な事象にまで科学的探究の射程を広げるSRによれば、理論の徳（理論評価基準）には数学的エレガントさ、簡潔性、適用範囲、新奇な予言の生産力、統合力、豊かさ、説明力など多様なものがあり、経験的データとの整合性はあくまでその中の一つではない。⁽⁶⁴⁾ これらのうちいずれの徳を重視するかは、ギャリーの言葉を借りれば、研究対象の性質や理論家の目的といった制約としての観点に依拠する。⁽⁶⁵⁾ こうした意味において、理論評価基準を経験的データとの整合性に限りがちな既存の国際政治学の実証主義は、経験主義的バイアスに陥っているのである。⁽⁶⁶⁾

c 古典的リアリズムとネオリアリズム

本稿が提示する多元的実在論によれば、経験的研究による理論評価の限界を自覚し、多様な理論評価基準を踏まえることで、国際政治学者は経験主義的バイアスを脱し、理論的多元主義を実現できる。このことを古典的リアリズムとネオリアリズムを例として考えてみよう。

思想的特色の強い古典的リアリズムに簡潔性という基準で高い評価を与えることは難しい。こうした点では国内要因を捨象し、理論の簡潔性を確保するネオリアリズムの方が優れている。だが同時に、我々は芳醇な思想的エッセンスを持つ古典的リアリズムに豊かさという基準では高い評価を与えられる。実際、この基準こそがネオリアリズムが簡潔性を追求する中で失ったとされる要素であろう。⁽⁶⁷⁾ マキャベリの外交論がウォルツやミアシャイ

マーのネオリアリズムと同等の簡潔性を持つとは評価し難いが、それがより深みのある思想的洞察を含んでいるとは評価しうるのである。⁽⁶⁸⁾

この際、経験主義的バイアスとの関連で重要なことは、古典的リアリズムとネオリアリズムの主な徳が経験的データとの整合性以外にあるということである。民主的平和論は経験的データとの量的な整合性、古典的リアリズムは思想的な豊かさ、ネオリアリズムは因果モデルの簡潔性といったように、各々の理論は異なる徳を重視しており、理論を経験主義的基準から一面的に評価するのは誤っている。こうした形で多様な理論評価基準を踏まえることで、我々は古典的リアリズムがネオリアリズムより劣っているといった偏った評価を下す必要はなくなるのである。

おわりに

国際政治学者はSRを方法論的基盤に据えることで、UDに由来する国際政治理論研究への批判を克服して理論的多元主義を実現できる。本稿はこうした方法論的ブレイクスルーを可能とする多元的実在論という創造的な方法論モデルを提示して、国際政治学の実証主義が経験主義的バイアスを克服する上での方向性を示した。ただし本稿では、SRに基づき実際に新たな国際政治学の実証主義理論を構築することまでは行っていない。⁽⁶⁹⁾ この点は今後の研究課題としたい。

ポストモダンニストの主張に反し、我々は知覚能力の限界や社会権力の存在にかかわらず、世界の近似的真理に漸進的に近づける。国際政治には相対的パワーやアイデアといった観察不可能な部分も含めて、因果関係や因果メカニズムといった形で真理が存在するが、それらは必ずしも単一のものではありえない。それゆえ、実証主

義者がしばしば暗黙裡に前提にしてきた、競合理論を比較しつつ事例と照合して単一の正しい理論を選ぶという前提は、経験主義的バイアスに陥っている。こうした過度な経験主義が科学哲学でLPの破綻をもたらしたことを鑑みれば、国際政治学の実証主義はLPに由来する道具主義に依拠して同じ過ちを繰り返してはならない。この教訓を踏まえて、観察不可能な対象を指定するSRを基盤にして制約条件下の理論的多元主義を実現することで、国際政治学の実証主義はポストモダンニズムへの強い耐性を備えた、これまで以上に頑強な方法論へと進化を遂げるのである。

SRによれば、事象の近似的真理への漸進的接近を目的とするという意味で、国際政治理論は世界の因果構造の解明を目指すなければならない。だが同時に歴史の根源的不確定性を鑑みれば、世界に関する高度に一般化された理論を得ることは途方もなく非現実的なこととなり、理論家にとり現実的な目標は、国際政治の特定の局面を特定の観点から表象する複数モデルの構築となる。こうした中庸を可能とする優れた方法論がSRの観点主義であり、それに基づくことで理論家は歴史家が描く豊かな叙述を無下に捨象することなく、それらを複数モデルの構築という形でくみとれるようになる。⁽⁷⁰⁾ 国際政治学者は歴史の複雑性を前に理論構築という営為を諦める必要はない。だが、そのために我々は国際政治における真理の多元性を受けいれる必要がある、このことによりはじめて、理論研究と歴史研究の間における真の生産的な対話が可能になるのである。⁽⁷¹⁾

(1) ピエール・デュエム（小林道夫・熊谷陽一・安孫子信訳）『物理理論の目的と構造』（勁草書房、一九九一年）；
W・V・O・クワイン（飯田隆訳）『論理的観点から——論理と哲学をめぐる九章』（勁草書房、一九九二年）。UD
はデュエム・クワインテーゼとも呼ばれる。

(2) 宮下はUDに言及しつつ、冷戦後の米国単極構造とソフトランシング論争、第一次世界大戦と攻勢至上主義、冷戦終結と「物質」対「観念」論争を例に挙げ、理論を事例から検証することの難しさを論じている。宮下明聡「事

例の解釈と理論の検証——安全保障分野の研究を中心として』『国際安全保障』第三八巻三号(二〇一〇年二月)七七—九一、特に七七ページ。保城はUDそれ自体を科学哲学の議論を踏まえて解説している。保城広至『歴史から理論を創造する方法——社会科学と歴史学を統合する』(勁草書房、二〇一五年)一〇七—一〇九ページ。

(3) ジョン・ルイス・ギャデイス(田中康友訳)「限定的一般化を擁護して——冷戦史の書き直しと国際政治理論の再考」コリン・エルマン／ミリアム・フェンディアス・エルマン編(渡辺昭夫監訳)『国際関係研究へのアプローチ——歴史学と政治学の対話』(東京大学出版会、二〇〇三年)一九八—二二三ページ。

(4) 理論家が普遍性、歴史家が特殊性を志向するという構図はたとえば、ジャック・S・リーヴィ(宮下明聡訳)「事実の説明と理論の構築——国際関係の分析における歴史学と政治学」エルマン／エルマン編『国際関係研究へのアプローチ』三六—七一ページを参照。

(5) Stathis Psillos, *Scientific Realism: How Science Tracks Truth* (London: Routledge, 1999); Anjan Chakravarty, *A Metaphysics for Scientific Realism: Knowing the Unobservable* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007); 戸田山和久『科学的事在論を擁護する』(名古屋大学出版会、二〇一五年)。科学哲学のSRと国際政治学のリアリズムは共に *realism* を標榜するが、両者に特別な関係があるというわけではない。またSRと関連するものに批判的実在論(critical realism)があるが、本稿では一貫してSRという用語を用いることとする。

(6) 観点主義は科学哲学会(Philosophy of Science Association)の前会長で米国の哲学者ロナルド・ギャリー(Ronald N. Giere)が体系化した学説でもある。Ronald N. Giere, *Scientific Perspectivism* (Chicago: University of Chicago Press, 2006); Ronald N. Giere, "Scientific Perspectivism: Behind the Stage Door," *Studies in History and Philosophy of Science*, 40-2 (June 2009), pp. 221-223. キャリーの『科学的観点主義(Scientific Perspectivism)』は、有力な学術雑誌『サイエンス』誌上にその書評が載せられていた。Peter Lipton, "The World of Science," *Science*, 316-5826 (May 2007), p. 834. 観点主義に対する有力な批判は、Anjan Chakravarty, "Perspectivism, Inconsistent Models, and Contrastive Explanation," *Studies in History and Philosophy of Science*, 41-4 (December 2010), pp. 405-412 を参照。同論文への観点主義の立場からの再批判は、Michela Massimi, "Scientific Perspectivism and Its Foes," *Philosophica*, 84 (2012), pp. 25-52 を参照。観点主義の社会科学への含意は、Thomas Brante, "Review Essay:

- Perspectival Realism, Representational Models, and the Social Sciences.” *Philosophy of the Social Sciences*, 40-1 (December 2010), pp. 107-117 を参照。観点主義は日本では、日本科学哲学学会現会長で日本におけるSRの泰斗、戸田山和久に支持されている。戸田山「科学的实在論を擁護する」特に二七五—二七九ページ。
- (7) 本稿で実証主義と述べるとき、それは科学哲学の論理実証主義 (L.P. Logical Positivism、以下LPと呼ぶ) とは異なる社会科学 (特に国際政治学) に固有のものを指すことにする。こうした点に関しては、宮岡勲「コンストラクティビズム——実証研究の方法論的課題」田中明彦・中西寛・飯田敬輔編『日本の国際政治学 第一巻 学としての国際政治』(有斐閣、二〇〇九年) 八六—八七ページを参照。
- (8) 本稿で述べる経験主義的バイアスとは、数ある理論評価基準の中で経験的データとの整合性を過度に重視する態度のことを指す。戸田山「科学的实在論を擁護する」一三七—一七四ページ。これまでも国際政治学者はSRに基づき、国際政治学の実証主義が抱える経験主義的バイアスの克服を試みてきた。たとえばアレクサンダー・ウエント (Alexander Wendt) はSRに基づき、実証主義コンストラクティビズムの視点から、アイディアという観察不可能な要因を科学的に論じうることを見事に示した。Alexander Wendt, *Social Theory of International Politics* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999). リアリストジョン・ミアシェイマー (John J. Mearsheimer) とステイヴン・ウォルト (Stephen M. Walt) はSRに基づき、近年の国際政治学にみられるトリヴィアルな仮説の検証に終始する態度のことを「粗末な仮説検証 (simplistic hypothesis testing)」(経験主義的バイアスと意味的に重なる) と呼び批判している。John J. Mearsheimer and Stephen M. Walt, “Leaving Theory Behind: Why Simplistic Hypothesis Testing Is Bad for International Relations.” *European Journal of International Relations*, 19-3 (September 2013), pp. 427-457. 国際政治学で「粗末な仮説検証」や経験主義的バイアスは、アクターの動機をア priori に利益極大化とみなし、その仮定の真偽を問に付す合理的選択理論、統計データとミクロな仮説の間の相関関係の分析を重視する定量理論といった形をとり、これらはいずれも観察不可能な対象への不可知論を主張する道具主義 (instrumentalism) とどう科学哲学テーゼに擁護される。Ibid., esp. pp. 433-434.
- (9) 理論的多元主義を擁護する有力なテキストは、Tim Dunne, Milja Kurki, Steve Smith, eds., *International Relations Theories: Discipline and Diversity* (New York: Oxford University Press, 2016) を参照。本稿の多元的実

在論と同じく、その R に基づき理論的多元主義を擁護する方法論モデルには、マンゼリナー・ベネット (Andrew Bennett) の「構造化された多元主義 (structured pluralism)」がある。Andrew Bennett, "The Mother of All Isms: Causal Mechanisms and Structured Pluralism in International Relations Theory," *European Journal of International Relations*, 19-3 (September 2013), pp. 459-481.

(10) Bennett, "The Mother of All Isms," p. 461. その他理論 (meta theory) として、理論の妥当性や自体を論拠として、理論のどこかの理論や方法論のラジカを指す。

(11) 科学哲学を国際政治学に導入した有力な研究には、コリン・エリマン、ミリアム・フェンディウス・エリマン、*Progress in International Relations Theory: Appraising the Field* (Cambridge: The MIT press, 2003); パトリック・シラデウス・ジャクソン、*The Conduct of Inquiry in International Relations: Philosophy of Science and Its Implications for the Study of World Politics*, 2nd ed. (New York: Routledge, 2016); Jonathan Joseph and Colin Wright, *Scientific Realism and International Relations* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010) など。

(12) テューム 『物理理論の目的と構造』: クロイン 『論理的観点から』。

(13) ケネス・ウォルト (河野勝・岡垣知子訳) 『国際政治の理論』(勁草書房、二〇一〇年)。

(14) Stephen M. Walt, *The Origins of Alliances* (Ithaca, N.Y: Cornell University Press, 1987).

(15) Steven R. David, "Explaining Third World Alignment," *World Politics*, 43-2 (January 1991), pp. 233-256.

(16) Gideon Rose, "Review: Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy," *World Politics*, 51-1 (October 1998), pp. 144-172; Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, and Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009); Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, and Jeffrey W. Taliaferro, *Neoclassical Realist Theory of International Politics* (New York: Oxford University Press, 2016).

(17) Steven E. Lobell "Threat assessment, the state, and foreign policy: a neoclassical realist model," in Lobell, Ripsman, and Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, chap. 2.

(18) John A. Vasquez, "The Realist Paradigm and Degenerative Versus Progressive Research Programs: An

- Appraisal of Neotraditional Research on Waltz's Balancing Proposition." *The American Political Science Review*, 91-4 (December 1997), pp. 899-912. Jeffrey W. Legro and Andrew Moravcsik. "Is Anybody Still a Realist?" *International Security*, 24-2 (Fall 1999), pp. 5-55. Kevin Narizny. "On Systemic Paradigms and Domestic Politics: A Critique of the Newest Realism." *International Security*, 42-2 (Fall 2017), pp. 155-190.
- (19) P・K・ファイヤアーベント(村上陽一郎・村上公子訳)『自由人のための知——科学論の解体へ』(新曜社、一九八二年)特に第六章。
- (20) 戸田山『科学の実在論を擁護する』一四九ページ。
- (21) Mearsheimer and Walt. "Leaving Theory Behind": Wendt, *Social Theory of International Politics*: Bennett. "The Mother of All Isms". 田中ユリヲ「批判的・科学実在論からみる国際秩序の形態生成——シルクロード経済ベルト(SREB)とアジアインフラ投資銀行(AIIB)の変革的インパクトを事例として」二〇一七年度日本国際政治学会研究大会分科会B-3(二〇一七年一〇月二七日)。
- (22) Jonathan Joseph. "Forum: Scientific and Critical Realism in International Relations: Editors' Introduction Philosophy in International Relations: A Scientific Realist Approach." *Millennium*, 35-2 (March 2007), pp. 343-344. SRと国際政治学をめぐる体系的な論文集は、Joseph and Wight. *Scientific Realism and International Relations* を参照。SRの国際政治学への導入に対する批判は、Fred Chernoff. "Scientific Realism as a Meta-Theory of International Politics." *International Studies Quarterly*, 46-2 (June 2002), pp. 189-207 を参照。同批判へのSRの視点からの再批判は、Colin Wight. "A Manifesto for Scientific Realism in IR: Assuming the Can-Opener Won't Work!" *Millennium*, 35-2 (March 2007), pp. 379-398 を参照。
- (23) 伊勢田哲治「科学実在論は「きんぐ」のか」『Nagoya Journal of Philosophy』七巻、五四—八四ページ。成熟した科学とは「きちんとした理論をもち、ある程度以上の成功をおさめ、科学者の共同体において支持されている(あるいはそれを支持する科学者の共同体がある)」ということを意味する。伊勢田哲治「疑似科学と科学の哲学」(名古屋大学出版会、二〇〇三年)一二三ページ。たとえば国際政治学には多様なリアリスト理論があり、それらは歴史的事象(第一次世界大戦、冷戦等)をある程度説明することに成功し、リアリストの共同体にある程度支持され

ている。こうした意味において、筆者は S/R を支持する他の国際政治学者と同じく、方法論的自然主義（自然科学と社会科学を連続的に捉える立場）に立った上で——自然科学のような厳格な統制実験が困難にもかかわらず——国際政治学を成熟した科学とみなしている。

(24) 戸田山『科学的実在論を擁護する』一三二ページ。ワイトによれば、国際制度や相対的パワーは観察不可能だが、国際政治学者がそれらを措定するとは妥当であるという。Wight, "A Manifesto for Scientific Realism in IR," p. 389.

(25) 近似的真理とは「ある条件のもとではおおむね」理論の言っている内容が世界のありかたと対応している」ということを意味する。伊勢田『疑似科学と科学の哲学』一二三—一二四ページ。

(26) Wendt, *Social Theory of International Politics*.

(27) Mearsheimer and Walt, "Leaving Theory Behind"; Bennett, "The Mother of All Isms."

(28) 反実在論とは D や道具主義を含む S/R に対抗する科学哲学上の立場の総称である。

(29) Giere, *Scientific Perspectivism*; Chakravartty, "Perspectivism, Inconsistent Models, and Contrastive Explanation," pp. 405-407; Massimi, "Scientific Perspectivism and Its Foes," pp. 29-30; 戸田山和久『科学的実在論を擁護する』一五八—一五九、二八五—二八六、二八八—二八九ページ。

(30) ジェニファー・ステリング・フォーカー (Jennifer Sterling-Folker) は「我々の理論は常に誰かのため (for someone) 何かの目的のため (for some purpose)」であると述べ、観点主義的発想の妥当性を示唆している。Jennifer Sterling-Folker, "Realist Theorizing as Tradition: Forward Is as Forward Does," in Annette Freyberg-Ian, Ewan Harrison, and Patrick James, eds., *Rethinking Realism in International Relations: Between Tradition and Innovation* (Baltimore, Md.: Johns Hopkins University Press, 2009), p. 198.

(31) たよえびステイシー・ゴダード (Stacie E. Goddard) とダニエル・ネixon (Daniel H. Nexon) は「ネオリアリストキマクロ還元主義者 (macro-reductionist) と呼んでいる」。Stacie E. Goddard and Daniel H. Nexon, "Paradigm Lost?: Reassessing Theory of International Politics," *European Journal of International Relations*, 11-1 (March 2005), p. 13.

- (32) ケネス・ウォルツ（渡邊昭夫・岡垣知子訳）『人間・国家・戦争——国際政治の3つのイメージ』（勁草書房、二〇一三年）二一七ページ。こうした認識を裏付けるようにウォルツの古典的著作の一つには、英米を事例とした民主政治と外交政策をめぐる体系的な研究がある。Kenneth N. Waltz, *Foreign Policy and Democratic Politics: The American and British Experience* (Boston: Little, Brown, 1967).
- (33) ショーン・J・リアンシャイマー（奥山真司訳）『大国政治の悲劇——米中は必ず衝突する』（五月書房、二〇〇七年）。
- (34) ショーン・J・リアンシャイマー／ステイーヴン・M・ウォルト（副島隆彦訳）『イスラエル・ロビーとアメリカの外交政策』全二冊（講談社、二〇〇七年）。
- (35) ショーン・J・リアンシャイマー（奥山真司訳）『なゼリダーはウソをつくのか——国際政治で使われる五つの「戦略的なウソ」』（五月書房、二〇一二年）。
- (36) Randall L. Schweller, *Unanswered Threats: Political Constraints on the Balance of Power* (Princeton, N.J.: Princeton University, 2006).
- (37) Ibid. esp. chap. 2.
- (38) 1) 種のリトリクス批判を Vasquez, “The Realist Paradigm and Degenerative Versus Progressive Research Programs”; Legro and Moravcsik, “Is Anybody Still a Realist?”; Narizny, “On Systemic Paradigms and Domestic Politics” を参照。
- (39) M. Weisberg, “Three Kinds of Idealization,” *Journal of Philosophy*, 104–12 (December 2007), p. 644; Martin R. Jones and Nancy Cartwright, eds., *Idealization XII: correcting the model: idealization and abstraction in the sciences* (New York: Rodopi, 2005).
- (40) Weisberg, “Three Kinds of Idealization,” p. 639.
- (41) ノンシャイマー『大国政治の悲劇』。
- (42) Nancy Cartwright, *How the Laws of Physics Lie* (New York: Oxford University Press, 1983).
- (43) Giere, *Scientific Perspectivism*, p. 60. 国際政治を科学として同様に見解を Sterling-Folker, “Realist Theorizing as

- Tradition”, p. 198 を参照。なおこの制約の項数は四項に限られな。
- (44) ミトシャイマー『大國政治の悲劇』二八七—二九三ページ。
- (45) 同書、特に第二章。
- (46) Jack Snyder, *Myths of Empire: Domestic Politics and International Ambition* (Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1991), chap. 4.
- (47) Ibid. chap. 2.
- (48) Yosef Lapid, “The Third Debate: On the Prospects of International Theory in a Post-Positivist Era.” *International Studies Quarterly*, 33-3 (September), pp. 235-254.
- (49) Steve Smith, “Positivism and Beyond.” in Steve Smith, Ken Booth, and Marysia Zalewski, eds., *International Theory: Positivism and Beyond* (Cambridge: Cambridge University Press), pp. 15-16.
- (50) Ibid., pp. 36-37.
- (51) LP の系譜については、ibid., pp. 14-18; 野家啓一「実証主義」の興亡——科学哲学の視点から——』『理論と方法』第二六卷一号(二〇〇一年)三一—八ページ; 戸田山『科学的事実論を擁護する』第一章を参照。
- (52) 道具主義に関する詳細は、戸田山『科学的事実論を擁護する』三八—五〇ページを参照。
- (53) Milton Friedman, *Essays in Positive Economics* (Chicago: University of Chicago Press, 1953); ウォルトン『国際政治の理論』。トリートマンの道具主義は、Mearshemer and Walt, “Leaving Theory Behind,” p. 433。ウォルトンの道具主義は、Wight, “A Manifesto for Scientific Realism in IR,” p. 380 を参照。オール・ウエーバー (Ole Weaver) はウォルトンの議論に反経験主義 (反実証主義) ——理論と現実の間の断絶を受けいれる態度——を見いだしている。Ole Weaver, “Waltz’s Theory of Theory,” *International Relations*, 23-2 (June 2009), esp. p. 217. それに対して本稿はワイトの議論に立脚して、ウォルトンの議論をラディカルな経験主義——観察不可能なものには知りえない——が不可知論に転化したものと解釈している。Wight, “A Manifesto for Scientific Realism in IR,” p. 380.
- (54) Wight, “A Manifesto for Scientific Realism in IR,” p. 381.
- (55) ワイトは一部の解釈主義者が観察可能な対象にまじり道具主義の立場をとっていることを批判する。Ibid., p. 380.

- (56) ウォルトズ『国際政治の理論』。Kenneth N. Waltz, "Evaluating Theories," *The American Political Science Review*, 91-4 (December 1997), pp. 913-917 を参照。
- (57) もともとこのことは解釈主義それ自体を批判しているわけではない。
- (58) こうした主張に対する反実在論陣営からの批判には、科学の目的を経験的に十全な (empirically adequate) 理論を与えること——観察可能な対象に任意の理論的説明を与えること——とする、B・C・ファン・フラアーセン (Bastiaan Cornelis van Fraassen) の構成的経験主義が想定されよう。B・C・ファン・フラアーセン (丹治信春訳) 『科学的世界像』(紀伊國屋書店、一九八六年)。
- (59) たとえば、カール・R・ポパー(大内義一・森博訳)『科学的発見の論理』全二巻(恒星社厚生閣、一九七一年)；N・グッドマン(兩宮民雄訳)『事実・虚構・予言』(勁草書房、一九八七年)を参照。
- (60) 民主的平和論の古典は、ブルース・ラセット(鴨武彦)『パクス・デモクラティア——冷戦後世界への原理』(東京大学出版会、一九九六年)；Michael W. Doyle, "Liberalism and World Politics," *American Political Science Review*, 80-4 (December 1986), pp. 1151-1169 を参照。
- (61) ミアシャイマーとウォルトは民主的平和論が、民主主義と平和の間の相関関係分析にとどまり、その因果メカニズムを明らかにしていないと批判している。Mearshimer and Walt, "Leaving Theory Behind," p. 442. ただし次第に民主的平和論においても、こうした欠点を克服すべく、その因果メカニズムを明らかにしようとする試みが出てきている。たとえば、Kenneth A. Schultz, *Democracy and Coercive Diplomacy* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001) を参照。
- (62) Mearshimer and Walt, "Leaving Theory Behind," pp. 435-437.
- (63) ジャーナルの主張は、Christopher Layne, "Kant or Cant: The Myth of the Democratic Peace," *International Security*, 19-2 (Fall 1994), pp. 5-49, esp. 38-39 を参照。
- (64) 戸田山『科学の實在論を擁護する』一四二、二八五—二八六ページ。
- (65) Giere, *Scientific Perspectivism*, p. 60.
- (66) この述べたる経験主義的バイアスは、ミアシャイマーとウォルトが述べる「粗末な仮説検証」とも言い換えられ

よる。Mearsheimer and Walt, "Leaving Theory Behind."

(67) Richard K. Ashley, "The Poverty of Neorealism," *International Organization*, 38-2 (Spring 1984), pp. 225-286.

(68) マキャベリの外交論の意義について、Markus Fischer, "Machiavelli's Theory of Foreign Politics," *Security Studies*, 5-2 (Winter 1995-1996), pp. 248-279 を参照。

(69) SR に基づく理論構築の先駆的試みは、Wendt, *Social Theory of International Politics* を参照。

(70) 歴史研究と理論研究を架橋する方法は多元的実在論に限られない。たとえば保城の過程構築はそれへの有力なオルタナティブである。保城『歴史から理論を創造する方法』第五章。

(71) スティーヴン・ペルツ (Stephen E. Peletz) は、「結局のところまともな外交史家にとっては、実証主義的・行動科学的手法を採用することにより得るものが、そうすることで失うものよりも大きい」と論じる。スティーヴン・ペルツ「新しい外交史の構築へ向けて——国際政治の方法論に万歳二唱半」エルマン／エルマン『国際関係研究へのアプローチ』九四ページ。本稿はその際、外交史家がとる実証主義方法の強化を試みたものである。